



Est.1912

# よこと館だより

発行：至誠学舎立川 編集：法人事務局



## オレンジリボンが児童虐待防止のシンボルマーク

2004 年 9 月、栃木県小山市でおきた 3 歳と 4 歳の兄弟の虐待死は、当時、実に衝撃的な報道でありました。幼い子ども二人を橋の上から川に投げ入れるという行為に戦慄を覚えました。人はいったいどこまで残酷になってしまうのか、加害者の背景に何があったのだろうか、どうしたらこのような悲劇を無くすことができるのか、きっと誰もがそう思ったに違い無いでしょう。これを機に 2005 年、二度と同じような事件が起こらないようにという願いを込めて、地元の里親らの団体が中心となり、子どもへの虐待防止推進を旗印に、オレンジリボン運動は始まりました。

このことより先の 2000 年 11 月には増加の一途をたどる児童虐待案件に対峙するために「児童虐待の防止等に関する法律」が施行されていました。しかし、子どもの虐待防止推進は法律を司る公的な機関だけがその役を担えば良いということではなく、国民の一人ひとりが社会としての責任をもって子どもの権利を護り、子育てに優しい社会を作ることが子どもの虐待防止につながるものとして、広く「市民運動」として、全国に広がり今日まで活動が続いてきています。

このオレンジ色の由来は、現在、オレンジリボン運動の総合窓口を担う児童虐待防止全国ネットワークのホームページ (<https://www.orangeribbon.jp/>) によると、里親家庭で育った子どもたちが「子どもの明るい未来を示す色」として選んだと記載があります。

この子どもたちの社会への期待に対しては、心から応援することができているのでしょうか。

厚生労働省では、法律が 11 月に施行された虐待防止推進月間と位置付けて広く啓発活動を行っています。十分に心から応援することができていない現実、全国の児童相談所が対応した児童虐待 2021 年度には 207,659 件を数え、そのうち 1,000 人以上が虐待により命を奪われているとの報告があります。



し、同じ社会の一員である私たち大人が、

されたことから、毎年 11 月を児童虐待防止推進月間として、残念ながらも、そこにはあります。数字を追えば、その件数は右肩上がり、さらには、毎年 50 名を超える子どもが、1 週間に一人、尊い命が失われ続

ある時期から私は、この現実を、まだ知らない多くの人に伝えることにしました。この現実に関心を持ってもらい、欲を言えば、出来ることから行動してもらえるように伝え続けることが、自分にできる、明日を変えようするための一歩であると信じて続けてきました。この先も、ジャケットの左胸のフラワーホールにオレンジリボンをつけて静かな主張を続けていく所存です。きっと変わっていくはずと念じて、「変わってきたね」と実感を持てるようになる時まで、伝え続けていこうと思っています。

<児童事業本部 本部長 石田芳朗>

<参考>

○令和 4 年度 児童虐待防止推進月間・標語

『もしかして?』ためらわないで! 189 (いちはやく)

○オレンジリボンたすきリレー (<http://orange-tasuki.net/>)

## 本部事務局だより 「小善は大悪に似たり。大善は非情に似たり」

京セラ、KDDI を創業し、倒産した日本航空を再建させ「経営の神様」と言われた稲盛和夫氏が 8 月 24 日老衰の為に亡くなりました。晩年、氏は「盛和塾」という経営塾を開催し、若き経営者に自らの経営体験にもとづき経営の原理原則、経営手法を指導したことで有名です。

稲盛氏は、その塾の講話で「小善は大悪に似たり。大善は非情に似たり」と語っています。最近、コロナ禍で「叱られたことの無い若者に不安が広がっている」という記事がありましたが、上司と部下の関係でも、信念もなく部下に迎合する上司は、一見愛情深いように見えますが、結果として部下をダメにしていきます。これが「小善は大悪に似たり」の部分です。表面的な「やさしさ」は時に成長を阻害し相手を不幸にします。逆に信念をもって厳しく指導する上司は、非情な上司に思えるかもしれませんが、長い目で見れば部下を大きく成長させることになり、これが大善です。

「嫌われたくない」「良い人と思われたい」と誰しも思いがちですが、それが本当にその人の為になっているか、今一度見直す必要があるかもしれません。

(法人事務局長 野島忠幸)

## 事業本部情報

### 児童事業本部

11月1日、3年振りとなる「0歳からの親子コンサート」をアイムホールで開催しました。この事業は今年で17回目となります。11月が児童虐待防止推進月間であることから、子育て中やその支援者に改めて子どもを大切に社会で育てようという取り組みの一環です。このコンサートの歌とトークは、10年間の留学生ホストマザーの経験を活かされて「命の参観日」という歌と講演を全国の小・中・高校で行われている“玉城（たまき）ちはる”さん。ピアノは鎌倉で音楽教室を主宰される傍ら、親子コンサートなど親子さんを支援する活動もされている“塚田教予（つかだ のりよ）”さんです。副題が「子ども達は泣いても・歩き回っても大丈夫」というとおり、子どもは自由に立ち歩いて、ステージにもあがって踊ったり、ピアノを触ったりと楽しい体験ができるコンサートです。子連れでは周りに気兼ねして、なかなかコンサートには行けないという子育て中の方もゆったりとして時間を過ごしていただきました。（至誠こどもセンター所長 島田美喜）

### 保育事業本部

令和5年度に向けての入園見学会を7月から行っています。10月までに10回程で各回3組の予約をされた保護者の方がいらっしゃいます。保育園のパンフレットやよく質問されることをまとめた資料などを用意して、写真などをお見せして1日の様子や行事等を紹介しています。コロナ禍で制限し保育室の見学や人数も抑えています。園児少数の良い点や園庭がない分、散歩の多いことをわかって下さる保護者の方もいらっしゃいます。

日野駅から徒歩で5分といっても坂の途中がどうなのか難しいですが、今では地域に根差して散歩時、駅の前を通り交番のおまわりさんに挨拶し笑顔振りまいて帰ってくるお子様たちです。これからも笑顔・仲良し・育ちあいの合言葉で職員一同息を合わせて行きたいと思います。（しせい太陽の子保育園 園長 廣瀬優子）

### 高齢事業本部至誠ホーム

巷では新型コロナの感染者も減少傾向で、さまざまな場面で規制や自粛の緩和が進んでいるようです。しかし、私たち福祉の世界では、未だにご利用者や職員の感染が相次いでおり、世の動向とは乖離している印象です。

つい先月、至誠ホームミンナの高齢者グループホームでも入居者・職員計21名が感染するクラスターが発生しました。ゾーニングをはじめ、しかるべき措置をとってケアにあたりましたが、狭い空間の中で、認知症を患いながらも自立度の高い多くの入居者は、終日マスクをして居室で過ごすことなど到底困難です。職員もそれに寄り添い行動するため、最初の感染者発覚からわずか一週間でこれだけ感染が拡大してしまいました。

幸い国分寺市医師会のご協力もあり、施設内での治療を実施し短期での終息となりましたが、ウィルスの驚異的な感染力と、グループホームにおける感染防止対策の難しさを思い知らされました。

現在、ミンナ全体で今回の振り返りと今後の対応を検討中です。冬に向かってインフルエンザの流行も懸念されます。「心の休まる日はいつ来るのか？」そう思いながらも、現場スタッフは今日も使命を果たすべく頑張っています！

（至誠ホームミンナ 園長 諏訪 逸）

（編集後記）宅配スーパーのチラシを見ていると、「次回より値上げさせていただきます」の文言が今年に入って多く目に入ります。物価上昇はいつまで続くのか…家庭にとっても職場にとってもシビアな問題ですね。（小）